

猫と人のはなし

こうち
河内愛子

1

「おたくの猫ちゃんは、どこからきたの」

などと尋ねると、大ていの飼い主の話はなかなか止まらなくなる。一方のわたしは、実をいえば自分の家の猫以外の犬や猫に、それほど関心はない。育った環境に犬や猫がいなかったせいかもしれない。しかし以前から猫大好きな人の話を聞くのは、好きだった。可愛がっている人自身のこととも。

猫と二人暮らしの自分の晩年は想像したこともなかった。わたしはあつさりした同居人だと思っ。黒と白のブチで、野良猫の母親から生まれた普通のメス猫デージーは、十七歳でここ数年、予防注射もしないが、病気もしない。ありがたいのは、外を歩き回っていても車の音がするとパツと側溝に避難できること。もともと彼女は長女の猫で、母猫が仔猫三匹をひき連れて迷いこんできた家から、選んで連れてきた一匹である。そのとき娘はデージーを毎日外に連れ出して車から身を守る教

育をしたと言っていたが、どのようにしたかは、聞かずにしまった。そんなことが果たして教えられるのだろうか。とにかく、怪我も病気もせずにくれるのはありがたい。前にいたオス猫たちは、こうはいかなかった。わたしは特に話しかけも遊んでやりもしない。それで退屈もするのだろう。新聞や本を読んだり、手紙を書いたりしているとテーブルにあがってきて邪魔をする。「邪魔しないでよ」と言うと、黙って降りる。少し気の毒だ。

二〇一四年の春、知らない女性からハガキがきた。発信者の名前のそばに「まきさんの友人」と添え書きしてある。文面はその人の実家の後片付けに佐々木和彦さんをお願いしたら、とても親切に頼んだ以上の仕事をしてくれた。そのとき河内さんのお名前が出たので一筆しました、と書いてある。確かに佐々木氏はわたしと長いあいだ親しい良子ちゃんが三年前に結婚した夫だが、わたしと彼は結婚式に一回会ったきり、狐につままれた気がしたが、まあ電話をかけてみた。すごく無愛想な男性が出てきて、つつけんどんに妻なる町子さんと呼んだ。町子さんも大して話す人ではなかったが、わたしたちは、一九八九年、昭和の代変わりの時していた「天皇制」の勉強会にまきさんに誘われて一度きた人で、会っていることがわかった。そのあと七日町の通りで会ったとき、懐かしそうに声をかけてくれた人でもあった。どっちのときも名前は知らなかった。ずいぶん前のことである。いつかお会いしましょうねと電話を切って、その人のことは忘れてしまった。まきさん

とは高校や大学で一緒だった友人ではないらしい。

その年の暮れだったか、町子さんの夫が亡くなったこと、続いてずっと飼っていた十九歳の猫が死んだこと、夫の死より猫の死のダメージが強いようだ、とまきさんから聞かされた。今回は人ごとではなかった。夫の死、長女の死とひき続き、わたしの家に残ったのはデージーだけ。たかが猫一匹でも、それは動き回り、食べたがり、鳴く。生きている生命だ。町子さんは知らない人だが、十九歳の猫を失ってはどんなに辛く哀しいか。してあげられることがあるとは思わないが、手紙を書いた。もっぱら自分と家族のことを。

しばらくして電話をもらった。どこの病院に通っているか、予約日はいつかをきかれた。

「私は日時を決めてデモに行ったり人とお会いすることができないたちです。約束すると時間や場所をまちがえないか、不安で眠れなくなるんです。気が向いたとき、ひょっこり病院に行きますから」

市役所を定年まで勤めあげたらしい人が、そんなこと言うか、と妙な気がしたが、わたしはわかりました、と言った。

ものすごく冷たい風の吹く日だった。脚のリハビリをして支払いに呼ばれるのを待ってベンチに座っていると、いきなり町子さんがあらわれた。そうかこの人ね、小柄なふっくらした人、見おほえがあった。病院はメインストリート七日町の裏側の通りにある。どこかでランチかコーヒーでも

と言うと、彼女はこの古ぼけた待合室でいいと言う。仕方なくそこに座って話を聞いた。

夫は市役所の同僚で地元大学の卒業生。子供は二人。わたしの家は山形駅に近いが、彼女の婚家は北山形駅よりさらに北だからさういぶん離れている。もともと農家だったから敷地は広い。夫の父と継母、知的障害のある義弟と同居し、公務員をする一方、農家の嫁あつかいの人生を送った。今となっては家も土地もすべて彼女のものだ。

「ええ、お金もたくさんあります」

自分からそんなこと言う人を初めて見た。一部分は施設にいる義弟のものだ。しかし暗い顔の暗い話だ。一番辛かったのは義母の溺愛する知的障害のある義弟のセクハラだった。聞いていたら、いらいらしてきた。なんで逃げ出さなかった？　なんで夫や実家に相談しなかった？　あなたには経済力も気力もあったはずではないか。「実家の父が出てくることに反対したもので」。納得できない。そのとき、話題が変わった。

「私は猫がいたから、あそこで生きてこれたんです」

十九年前、野良の母親が仔猫三匹を連れて入ってきた。デージーと同じだ。仔猫は本当に可愛い。としよりは反対だったが、子供たちと一緒に頼みに頼んで、承知させた。安心してか、母猫は消えてしまった。乳離れしていない三匹を胸の上のせて、彼女は毎晩眠り、三匹とも無事に育った。二匹はやがて出て行ったが、最後のメスは十九歳までそばにいてくれた。他にもいろいろの猫が出

入りし、彼女を慰め、たくさんの経験をくれた。

「猫と一緒に私は幸せなんです」

と、彼女は言った。

「そうなら、また飼えばいいじゃないですか」

「もう無理です。七十歳過ぎましたから」

「先のことばかり心配してたって、暗くなるばかりでしょ。今、可愛がる猫がいたら、人生変わると思います。誰だって明日がわからないのは同じじゃないかしら」

「飼うとしたら、私はとしより猫が欲しいんです」

嬉しくなった。わたしにもしてあげられることが、できた。

「としより猫ならいいですね。それじゃ探しましょうよ」

彼女はその難しさをちゃんと知っていたと思うが、反論はしなかった。そして冷たい北風に向かってバス停へ去って行った。

町子さんはそのあと保健所に問い合わせたり、犬猫保護のNGOの勉強会に行ったりし始めたようだった。わたしは猫大好きで複数の猫を飼っているあちこちの知人に頼んでみたが、としとつても家族である猫を、あげます、という家は、全くなかった。

「そんなの無理ですよ。仔猫でいいじゃないですか可愛いですよ」

もつともなことを言われた。春になったら野良猫の産む仔猫が見つかるだろうとも。霞城公園は野良猫のたまり場、猫を愛する人たちが餌やりにくる。器量好しで人なつこい猫は、さつさと飼い主に出会う。町子さんは、そんなことは百も承知。しかし彼女の要求に合う猫は見つからない。

六月になった。ある日、茶トラのチビ猫がわが家の庭に迷いこんでギャーギャー鳴きはじめた。骨と皮ばかり、どこに行っても食べ物ももらえないのだろう。デージーはいつもリビングのガラス戸を開けさせて庭に出る。しかし自分の四分の一しかないチビ猫がガラス戸の外で鳴きだしているのが怖くて、デージーは出て行けない。しつぽばかりむやみと長く、やせこけたみつももない仔猫である。困ってしまう。家猫でも野良猫でも無条件に愛を注ぐ人たちの仲間に、やっぱり自分はいれない。しかし目の前のやせこけた小さい生き物に知らん顔をすることも、できないのであった。

上等のかりかりではなく、たまたまあったご飯に、これもたまたま戸棚に何年も入れっぱなしの古いかつぶしをかけて、ガラス戸の外に出すと、仔猫はうなり声を出し、一、二分で食べてしまった。お代わりくれ、とわめく。ひもじいのだ。いまましいが、お代わりをやる。それも一分でなくなつた。おむすび一個分のご飯を食べたことになる。やれやれ、デージーはベッドの下で震えていた。主客転倒、チビ猫はわずかの隙に、家の中にとびこんできて、走り回る。

「デージーがいるから、あんたまで家猫にはできないよ」と言っても、俊敏で小さい猫をつかまえることも追い出すことも、なかなかできない。こういうことは、だいたい性に合わないのだ。屋根の上でも、梅や木蓮の樹のてっぺんでも、彼は「食べ物くれ」と叫び続ける。一方、デージーはカリカリも缶詰のキャットフードも食べられなくなってしまった。ご近所さんも、「うるさいね、河内さん」ここで、また猫を飼ったのか」と噂していたらしい。

三日目、音もなく出て行っただけ、夜中がきても、デージーは帰ってこなかった。家出したんだ。わたしは真っ青になった。猫にくわしいあちこちに相談の電話をする。

毎週、無農薬野菜を届けにくる須藤君は言った。

「一番下手なことをやりましたね。迷い猫には、一切食べ物をやっちゃいけない。居着いてしまつ。家猫が大切ならね。いくらわめいても餌が出てこないとわかれば、野良猫は別の場所を探していなくなる。腹を空^すかした猫（人）を見て、食べ物をやらずにいられないのは、わかりますけどね」でもやってしまったのだ。茶トラは居着き、デージーは帰ってこない。

デージーが唯一なついて怖がらない息子夫婦は、電話の向こうで一緒に困ってくれた。

「デージーはメスで高齢だ。大して遠くには行ってないよ」

と息子は言った。彼らも迷いこんできた仔猫を飼うことになり、とても可愛がっている。うちに迷いこんできた茶トラ猫に同情もしている。東京のアパート住まいだから、デージーを捜しにくる

こともできない。

三人目は町子さん。いくら言っても彼女はうちにこようとはしないから、デージーを見たことはない。ただ話は喜んで聞いてくれていた。おなじみ猫と知っているだろう。

「困りましたね。おうちの周りを捜すしかないですね」

と彼女は言った。捜して見つける自信は、わたしにはない。チビの迷い猫ではなく、デージーを捜し出す方に、わが家の問題は移ってしまった。

翌日はわたしの母校の山形支部同窓会だった。出席の通知はずっと前に出してあるし、家出の猫捜しで欠席なんて、一生懸命準備をしている若い人たちに申し訳ない。十時に家を出た。会食後も若い人たちとおしゃべりし、三時に家に戻った。

驚いたことに、町子さんが玄関前の石段に腰かけていた。誰からうちにいらっしやいと言われても、こない人と思っていたのだが。そばに百五十センチ立方ぐらいの白いケージを置いている。空は雨もようで、水色の傘も置いてあった。柄^えには名札がついていて、姓名の代わりに「猫ばあさん」と書いてある。おかしい。屋根の上では、相変わらずチビ猫がワーワー騒いでいる。

彼女は留守の家にきて、会ったことのないデージーを捜してくれていた。見つからないので、ホームセンターに行つてこのケージ（かなり大きい）と猫の好きそうなおやつを買つて、タクシーで戻ったそうだ。チビ茶トラを捕まえるつもりで待っていたのである。捕まえた茶トラを引き取る

つもりなのだ。胸が熱くなった。としより猫から方針転換したのだ。わたしとデージーのために。あんなに、若い猫は飼わないと言っていたのに。ケージの中には、山盛りのカリカリが置いてある。けものをおびき寄せ、わなで捕まえるハンターみたいに。町子さんは静かで落ち着いている。確信ある人の落ち着きだ。

鍵をあけて家に入って着がえ、あわてて封筒に交通費やら何やらの見当をつけて、お金をつつこんだ。たぶん足りないけど。第一チビ猫が捕まりデージーが見つかるかもわからない。冷たい石段にわたしもかけた。町子さんはずっと黙っている。チェツクのストラックスに紺無地のTシャツは、少し寒そうだ。

猛スピードで屋根から楓の枝にとび移り、カリカリに猫がむしゃぶりついたのと入り口の戸に町子さんの手が伸びたのはほぼ同時だったが、猫がとび出したのは、一秒早かった。「腹すかしてるから、またすぐきます」と町子さんは言った。間もなく二度目も逃げられた。三度目、空腹に耐えかねた猫が食に一秒気をとられたとき、町子さんはバツと幅十センチ、高さ二十センチの戸を閉めた。さすが！ 出口を探して走り回るチビ猫に、町子さんはくり返し話しかけている。とても優しく。

「大丈夫、大丈夫。こわくないよ、こわくないよ。じき出られるからね」

小雨が降りはじめた。彼女はケータイで自宅のそばのタクシー屋に、大型車でここまで来てくれるように頼んだ。出払っていたらしく車は三十分以上こなかった。空腹に負けて猫が食べ始めても、彼女は話しかけるのをやめなかった。ようやく猫の入ったケージが積みこまれたとき、彼女にかつぶし代ですと封筒を渡すと、上の空で彼女はバッグにそれをつっこんだ。何のことかわからないようだった。

車が出て行って五分ぐらい。玄関で猫が鳴いた。

「あなたはユーレイか、霊能者か」

わたしはデージーに叫んだ。タイミングが合い過ぎる。知らん顔して、デージーも一週間前から置きっ放しだったカリカリを息もつかず食べている。さっそく帰宅の時間に、息子たちに電話した。彼らも大喜びしていた。

「高い所かどこかから、見張ってたんじゃないか」

と彼は言う。あり得ない。うちの周りにそんな高い所はない。考えられるのはブロック塀をへだてた目下空き家のお隣さんだ。ご夫婦で施設に入り、用心のため戸締まりは厳重だ。ただし庭に面して濡れ縁がある。寒くない季節だから、庭から入りこんだデージーは濡れ縁で自宅の物音とチビ猫の鳴き声に耳を澄ましていたかも。夜も昼も。猫の耳は鋭いから人と猫の出入りは、手にとるようにわかる。灯台下暗し。わたしは一番近いお隣さんの庭に入ってみるなど全く思いつかなかった。

翌朝、町子さんに電話すると、「ユー、ユー、お母さんからよ」と彼女が呼んでいる。さっそく名前がついた。「遊」「友」のユーだって。センスが良いとわたしは感心した。昨夜から上等のサシミやら何やらの大ご馳走で、彼はすっかりその家の猫のつもりになったらしい。何にも増して、わたしは町子さんの明るく生きかえった声が嬉しかった。

2

一件落着して、わたしとデージー、町子さんとユーは平和に暮らすことになった。何ごとものぐらいうまく運ぶなら、人の世はずいぶん住みやすいことだろう。そんなことは起り得ない。

四ヵ月後の秋、わたしはちょうど山形にきてくれた息子のつれあいと一緒に、ドキュメンタリー映画「日本と原発」を見に行った。珍しくも町子さんがきていた。映画が終わってから、公民館の廊下でおしゃべりした。町子さんはにこにこしながら、「ユーのおながが大きいんですよ」と言う。びっくりして聞き返した。ユーがメスであることも、初めて知った。六月には幼い仔猫と思いきんでいた。「私たちが思ってたより大人だったんでしょね」と町子さんは言う。家から近隣の畑などまで出て行って走り回っていたから、と自然に起こることみたいに着き払っている。とんでもない。猫にあかるい彼女だから、あれからすぐ獣医のところへユーを連れて行って、避妊

手術をしたに決まっている（それが正しい飼い方だから）とわたしは思いこんでいた。わたしがあんまりびっくりしたので、町子さんはかえってそれに驚いたようだった。「決まったわけじゃないんです」。そうかもしれない。そこでわたしたちは別れた。

猫にあかるい町子さんは、まちがっていなかった。しばらくして、いつもの几帳面な字のハガキをもらった。

「縁側のすみにダンボール箱を置き、ぼろ布を重ねておきましたら、先日か細いミャー、ミャーと声がありました。てのひらに入るとも小さい仔が四匹いると思っただが、もう一匹いて、メス三匹、オス二匹でした。ミルクを買ってきてやっています。喜んでのみます。とっても可愛い。私のような駄目人間を信頼しきっている姿をみると、涙がこぼれます」

あなたは、七十年昔の人ですか、とんでもない、と思った。

石井桃子さんが一九五七年から八年に朝日新聞夕刊に連載した小説「迷子の天使」を、いのちあるものならゴキブリからライオンに至るまでいとおしむ。わたしの大好きな先輩と二十代のわたしがひっぱり合って読んだのを突然思い出した。登場する主婦は第二次大戦後の痛手の続いているころ、自宅の門の前に、生まれたばかりの目もあかない仔猫がしょっちゅう捨てていかれることに、とても困っている。何匹かは家の猫にするけれど残った猫のもらい手探しに、かけ回らずにはいられない。その中で猫と限らぬ迷い子たちに彼女の世界が広がっていく物語だが、今この作品を知っ

ている人はいないだろう。そして時代は変わるものだ。強者や多数によるいじめや虐待の世界は変わっていないどころか、ひどくなっているとしても。

「町子さん、今度はユーと赤んぼ猫を、どうか獣医のところ連れてってくださいよ。費用はわたしも手伝います。ユーとわたしは無関係ではないものね。五匹がもう少し育ってからだと、いつかいいかな。気が進まなかったら、わたしも行きますよ」

デパートの地下でばったり会ったので、わたしはほっとした。

「生き物をわざわざ痛い目に遭わせるなんて、可哀想でそんなことしたくないです」

ぶすっとして彼女が言った。

半年はすぐにたつ。赤んぼのメス三匹もさっさと成猫になる。それぞれが三匹から五匹の仔を産む。メディア、特に週刊誌の見出しで時折見るのは、ゴミ屋敷問題と並ぶ猫屋敷の問題だ。たまたまわたしが薬局で読んだ週刊誌の記事は地獄のようだった。貧しい一人暮らしの老人（男性）が、アパートの一室で野良猫を養い、猫はとめどなくふえた。衰えた老人はどうとう行政によって施設に送られる。後片付けに入った関係者が六畳の一室にいる猫を数えると、二十四匹いた。同種交配で生まれたらしく眼や脚のない猫もまじっていた。

町子さんは貧しい孤独な老人でもなく、何とか折り合いをつけて社会生活をしている。市役所時代、彼女の夫の友人だった同僚は、当時彼女は女性職員の中で、一番仕事ができ、とんでる女だったと言っていた。つきあいの浅いわたしは想像もできないが、たぶんうそではないだろう。時代も変われば、人も変わる。そしてわたし自身も。

現在ではなく将来のことなのに、週刊誌の記事はわたしをおびやかした。迷惑かけられたことも、不愉快な思いをさせられたこともないのに、あなたのしているのは動物虐待ですよと言いたくなる。六匹の猫に家も庭もかき乱されている彼女に、言葉が次第にきつくなっていったのだと思う。彼女は電話に出なくなった。ハガキに返事もよこさない。彼女を怒らせたくなくなかった。デージーとユーを助けてくれた彼女を。猫に関係ない友人のまきさんも、メールを出すと、ほっとしてくださいと言ってくる。へんですよね、とまきさんは言う。ほんとにへんだ。つながりが絶えて一年が過ぎた。猫は十匹になったかも。

困っていたら「のらねこくらぶ」という相談窓口を教えられた。二〇一六年の暮れだった。窓口のその女性は、「ご近所から相談がありましたので、年が明けたら電話して、どうしておられるかきいてみましょう」と言ってくれた。一七年一月五日、さっそく電話をもらった。

「とても喜んでくださいました。去年隣の奥さんが連れてってくださいましてメス三匹の手術をしたそうです。母猫とオス二匹は行方不明。安全な三匹と落ち着いて暮らしていらっしやるそうです」

ほっとして、お礼を言った。よけいなお節介で友達をなくした自分は馬鹿だが、彼女たちが平和

に暮らしていればそれでいい。ところが、またまたそれだけでは済まなかった。翌日、同じ人から電話がきた。今朝、町子さんから別人みたいな攻撃調の電話があった。

『のらねこくらぶ』って、いったい何をするところなの?』

「猫の殺処分をやめさせる運動をしています」

「そんなところは私に関係ありません」

と、ガチャンと切れたのだという。

「前はそう思いませんでしたが、やっぱり少しへんですね、すみません。ご迷惑かけました」

わたしは知らないその人に謝った。

「猫の問題は、結局は人間の問題なんです」

その人はしみじみ言った。

町子さんと知り合って間もないころ、動物愛護のイベントに行って、殺処分される猫のDVDを見せられたときのことを聞いた。「苦しんでいる猫たちを見て涙が流れて止まらなくて、途中で出てきてしまいました」と。

その彼女が昨日は殺処分をやめさせる運動に自分は関係ない、と言った。ケージから出られなくなった仔猫に膝について優しい声で大丈夫、大丈夫とくり返していた彼女。猫の殺処分をやめさせる運動は、たぶん何百万規模の問題だが、それは一匹ずつのいのちと幸福の問題から始まる。

戦争の死者が何千万であろうと、帰するところは、異なるいのちを生きる一人一人である。

今は老いて病んでいるかも。でも数年前、町子さんは一番近くにいたデージーとユーのいのちを、またユーの産んだ仔たちを助けてくれたのだ。今だって目の前にきたひもじい猫には食べさせ、凍えた猫は物置に入れ眠らせているにちがいない、とはっと気づいた。

この先、わたしは、年に数回は彼女にハガキを書くだろう。返事はきてもこなくてもいい。二匹か三匹の猫と一緒に彼女の残る人生が平和であることを願っていようと、あらたに思っている。